

# 戦間期における福井県織物業の動向とその構造変化 — 『福井縣統計書』の分析—

齊藤健人<sup>1</sup>

## 序章

本稿の目的は、1910年代から1920年代における、福井県織物業の動向を『福井縣統計書』の整理を通じて分析することにある。なかでも1920年代における不況を背景に、福井県織物業が構造変化を迎えたことを明らかにする。

本稿の分析対象となる福井県織物業については、様々な視点から研究が進められてきた<sup>2</sup>。例えば、力織機化や金融、そして生産組織などの視点である。まず福井県が「羽二重王国」と称されるようになった事実を輸出絹織物（主に輸出羽二重）生産額の急速な増加に着目し、分析したのが石井寛治（1965）である<sup>3</sup>。石井は、その急速な発展の要因を力織機化に求めた。その力織機化については、神立春樹（1974）が詳しく論じている<sup>4</sup>。神立は福井県坂井郡春江村を分析対象にして、力織機化の担い手を明らかにした。力織機導入にはある程度の資金や金融機関からの信用が必要であり、中小地主がその資金融通を受け、力織機化の担い手となり得た。その資金融通の担い手を明らかにしたのは、石井寛治（1974）である<sup>5</sup>。石井は、機業規模別で資金融通の方法及びその経路が異なる事実を指摘した。具体的には、中小規模の機業に対しては生糸商（＝羽二重商）が、大規模機業に対しては銀行が資金融通を担っていた。一連の分析によって、産地固有の発展の要が力織機の導入と普及であったことから、それに関わった担い手が明らかにされた。

その一方で、絹織物業の急速な発展の要因を生産組織に求めたのが、橋野知子（2007）であった<sup>6</sup>。橋野は急速な発展とともに起こった粗製濫造問題に注目し、産地自らの発展が重要であることはもちろんだが、政府による制度の構築も産地の発展にとって重要な役割を担っていたことを明らかにした。この指摘は、産地だけでなく政府や制度を含めた複合的な要因から発展が達成されることを意味し、以後の研究に大きな論点を投げかけたと評価できる。

また、製品の変化も福井県織物業の発展において重要であると認識されてきた。すなわち「羽二重王国」の研究が蓄積される一方で、「人絹王国」に関する研究も大きく進展してきた。その発端となったのは、山崎広明（1975）である<sup>7</sup>。山崎は、全国的な化繊産業の展開を、製造技術、製品・原料流通や労働力などから網羅的に分析した。さらに、人絹糸・製品の流通について福井県を対象にして詳しく分析したのが、春日野道治（2002）である<sup>8</sup>。春日野によれば、福井県における人絹織物の生産が綿糸との交織から始まったことによって、県外綿糸商社が製品及び原料の流通を担うようになった事実を明らかにした。それに加え、県外綿糸商社が福井県内の「機業家への支配」を進め、機業家に対する販売企画の働きかけがあったことが指摘された。

春日野と同様に福井県を対象にした分析を「人絹王国」と地域経済の関係性の視点から

進めたのが、笠松雅弘（1991）である<sup>9</sup>。笠松は、人絹織物の生産が浸透するにつれ、これまで農業重視であった地域が機業地に転換する一方で、出稼ぎが盛んになる地域も存在したことを明らかにした。つまり、人絹織物の台頭によって地域における産業構造の変化をもたらされたことを実証している。笠松の研究は、産業と地域経済の関係性を示した先駆的な分析と位置づけられるだろう。

これらの先行研究は、輸出羽二重と人絹織物の急速な発展という特徴を持つ戦前期の福井県織物業を丹念に分析してきた。しかし、羽二重から人絹への過渡期に関する分析は十分とは言えず、当該期における福井県織物業の動向は明らかにされていない。そこで、本稿は基本的な統計資料と位置づけられる『福井県統計書』を対象にして、当該期における福井県織物業の動向を明らかにしたい。

## 第1章 福井県織物業の動向とその詳細

### 第1節 福井県織物業の位置づけとその動向

まず福井県の産業構造を概観して、そこに福井県織物業を位置づけることから始めたい。第1図は、福井県における産業構造ならびにそこでの織物業の位置を長期的に捉えたものである。1910年における福井県の産業構造は、「農業」と「鉱工業」の割合が非常に大きく、特に「鉱工業」は、全生産額の57.7%を占めている<sup>10</sup>。しかしその後、産業構造は変化し、「鉱工業」の割合が大きくなる一方で、「農業」が減少の一途を辿る。1919年には「鉱工業」が9割近くを占め、福井県の産業構造における「鉱工業」部門の重要性が窺える。1920年代前半には「鉱工業」が減少するが、その間に「鉱工業」は一貫して60%を下回ることはなかった。1920年代後半になると「鉱工業」が70%台に回復し、以後その割合は拡大し続けた。他方、「農業」ならびに「その他」が縮小し続け、特に「農業」の割合は1910年の30.2%から1930年の17.2%へと、その規模が約半分まで縮小する結果となった<sup>11</sup>。以上の検討より、福井県経済が「農業」と「鉱工業」の産業構造から、「鉱工業」中心の構造に変化したと言える。

次に、同図（第1図）から福井県経済における織物業の地位を把握する。「鉱工業」に占める割合を観察すると、1910年時点で83.3%を示していることが分かる。それは1914年に一度53.8%にまで急落するが、翌年には74.9%にまで回復し、それ以後1936年まで70%台後半から90%台前半を維持している<sup>12</sup>。また、全生産額における織物業の位置づけをみると、1910年時点で織物業が全生産額の約半分を占めていることが分かる。1917年まで織物業の値に若干の動きがあるが、全生産額の半分近くを占めていたのは明らかである。織物業の割合は1918年に61.5%、1919年に70.6%とピークを迎えた。1920年代に入ると50%台に落ちるが、それを下回ることはなく1930年代には60%台にまで回復した。これらの事実から、織物業が当時の福井県経済にとって重要な産業の1つであったと評価されよう<sup>13</sup>。

次に、福井県織物業の動向を観察する。まず第2図から、福井県織物業の実質生産額の動向を確認する。福井県織物業の生産額は、1910年から停滞傾向にあり、第一次大戦が始

まった 1914 年には 175 万円へと下落した。しかし翌年に 342 万円となり、わずか 1 年で約 2 倍に増加し、その後も生産額は増加傾向を辿った<sup>14</sup>。ところが、その増加傾向は長く続かず、1920 年を境に減少傾向となり、1920 年から 1925 年まで減少し続けた<sup>15</sup>。1926 年には減少傾向を脱して、1936 年の 1,364 万円まで持続的に増加している。福井県織物業を生産額ベースで見ると、①1910 年~1914 年までの停滞、②1915 年~1919 年までの増加、③1920 年~1925 年までの減少、④1926 年~1936 年までの増加といった大まかな傾向が読み取れる。

次に、第 3 図に示した機業戸数や織機数等の各指標から福井県織物業の動向を確認する。1910 年には約 6,000 戸強あった機業戸数は、1915 年の約 4,000 戸弱まで減少したものの、1916 年の約 4,500 戸から 1918 年の約 7,500 戸まで急増する。職工数も同様に 1910 年から 1915 年まで減少し、1916 年から 1919 年にかけて増加する。力織機数は 1910 年から 1921 年まで持続的に増加した一方で、手織機は減少し続け、1914 年には力織機数を下回った。1910 年代において機業戸数、職工数ともにほぼ同様の動向を示していることが分かる。特に、1915 年以降の各指標の伸びは顕著であった。

しかし、各指標は 1920 年を境に減少する。機業戸数は、1919 年の約 6,000 戸強から 1928 年の約 1,300 戸まで急速に減少し、その増加は 1929 年まで待たなければならなかった。職工数も同様に 1919 年の約 2 万 8,000 人から 1923 年の約 1 万 5,000 人に減少した。職工数は 1924 年から回復し始め、1927 年に 2 万人台に乗り 1910 年代後半の水準に達した。力織機数は、職工数とほぼ同様の動きを示していた。

ここで、福井県織物業の諸特徴を時系列に整理すると、以下のようになる。福井県織物業は、第一次大戦の開戦によって一時停滞するが、1915 年から 1919 年にかけて輸出主導型の成長を達成した<sup>16</sup>。しかし、これまでの機業の過剰な設備投資による生産過剰ならびに機業家らの投機行動による金融逼迫が重なり、1920 年 3 月には日本の株価が暴落し、それは機業家に大きな影響を与えた。さらに最大の輸出先であったアメリカの不況も重なり、これらは福井県織物業へ経済的危機をもたらした<sup>17</sup>。その不況期の様子を福井県織物同業組合は、「(前略) 同九年三月に至り我財界の一角に生じたる低気圧は漸次四方に波及して形勢日に悪化し本縣機業界に大打撃を與へたり (後略)」と同組合刊行物のなかで回顧している<sup>18</sup>。つまり福井県織物業は、わずか十数年の間に激しい景気変動に見舞われたと言える。しかし、1930 年前後から福井県が人絹織物を中心とした産地に返り咲くことを鑑みると、福井県織物業は 1920 年代に不況期を乗り切ったと評価される。

次節以降では、その 1920 年代において福井県織物業がどのような変化を経験したのかを検証したい。第 2 節では福井県織物業の動向を地域別に観察し、その展開の特徴と県全体の傾向を代表する地域を挙げる。第 3 節では、福井県織物業を製品の変化という観点から分析し、年代別にどのような特徴が見出されるか検討する。

## 第 2 節 福井県織物業の地域別分析

本節では福井県織物業の動向を地域別（郡・市別）に観察し、福井県における代表的地域を抽出することとしたい。本節は統計上の整理に主眼を置き、各地域の個性やその形成要因の考察のための作業であることを予め断っておく。

第4図は、福井県織物業の生産額を地域別に表したものである。この図によると、1910年における福井市の生産額は、県内生産額の約半分を担っていたことが分かる。しかし、1913年には福井市の割合は40%を下回り、その後も低下傾向が続き、1920年には27.0%を示した。その値は1921年から1927年にかけて一度拡大したが、1910年代の水準に回復することなく、1936年には20.7%となった。その一方で郡部における生産額の割合は、拡大し続けた。特に坂井郡の値は1910年時に約10%だったが、1920年には約30%まで伸びた。坂井郡と同様に大野郡、今立郡も1910年から1920年にかけてシェアを拡大し続けた。以上の1910年から1936年にかけての長期的な観察から、次のことが指摘されよう。福井県織物業における福井市の地位が下がり、その一方で郡部の生産が伸びた。その郡部の中でもシェアの拡大に寄与していたのが吉田郡、坂井郡、大野郡、今立郡の4郡であった<sup>19</sup>。次に上記4郡について詳しく取り上げる<sup>20</sup>。

生産額、機業戸数、職工数等の各指標をもとに、上記4郡と福井県全体の動向を比較する。まず、第5図は、4郡の実質生産額を示したものである。吉田郡の生産額は、1910年代を通して停滞傾向にある。1918年になって漸く、その生産額は1910年時の値を超え、1919年から1921年にかけて増加傾向をみせた。しかし、吉田郡の生産額は、1922年から1925年にかけて下落した。一方で坂井郡の生産額は、1910年の249万円から一貫して増加傾向にあり、1921年には1,536万円に達した。しかし翌年から1925年にかけて、坂井郡の生産額は毎年下落し続けた。大野郡の生産額は、坂井郡の動向とほぼ同様の動きを示していた。他方、今立郡における生産額の動向は、上記3郡のものとは異なっていた。1910年代後半において生産額が伸びたことは確認されるが、1920年代前半においても増加傾向にあったのである<sup>21</sup>。その点で、上記4郡のうち今立郡は、福井県の動向と異なっていたと判断が可能であろう。

次の第6図は、吉田郡、坂井郡、大野郡の機業戸数、職工数、織機数を表している。坂井郡と大野郡から観察をみると、機業戸数、力織機数、職工数において県全体の動向と同様に1910年代後半の好調と、1920年代前半の低調傾向が確認される。一方で、吉田郡には1920年代前半における機業戸数の動向に、坂井郡、大野郡との相違点が見られる。それは、1918年から1920年にかけて急減したあと、1921年には急速に回復し、翌年も増加する点である<sup>22</sup>。この点において、吉田郡が福井県の動向と異なっていたと判断ができるだろう。

これまでの観察を整理すると、以下のようになる。福井県織物業の生産の中心地は、1910年には既に郡部へ移り、1920年代と1930年代にかけて、郡部の地位は高まり続けた。その一方で、福井市はその地位を年々低下させ、最終的には20%程のシェアとなった。この郡部の動向に最も寄与していたのが、吉田郡、坂井郡、大野郡、今立郡の4郡だった。な

なかでも坂井郡と大野郡は、福井県織物業の傾向を代表する地域と言ってもよい。

### 第3節 福井県織物業の製品別分析

本節では、第1表を用いて福井県織物業を絹、綿、麻など原料や製品の種類という観点から検討し、時期ごとの福井県織物業の特徴を明らかにしたい<sup>23</sup>。

1910年において、絹織物業は職工数、織機数、生産額ともに福井県織物業の90%近くを占めていた。しかし、絹織物業の割合は1910年代後半にかけて縮小し、なかでも機業戸数におけるシェアの縮小は顕著であった。その機業戸数の縮小に影響していたのは、麻織物業であった。麻織物業における機業戸数の割合は、1912年から急激に拡大し、1918年には福井県織物業全体の機業戸数の約6割を占めるほどに達した<sup>24</sup>。その一方で、1910年代における絹織物業の職工数、織機数は約8割、生産額は9割近くを維持していた。

しかし1920年代前半には、絹織物業の福井県織物業におけるウエイトは顕著に低下する。1920年から1925年にかけて、職工数は79.2%から64.9%へ、織機数は83.4%から67.8%へ、生産額は94.0%から87.1%へ下落している。その一方で、他の織物の割合が高まった。特に綿織物業では、職工数、織機数、機業戸数の増加が顕著だった。1920年代後半から絹織物業の各指標は、回復へと向かうが、1910年代水準に回復するまで1927年頃まで待たなければならなかった。

福井県織物業における絹織物業のウエイトは1930年前後から高まり、1910年代の水準を越し、1930年にはすべての値で90%台を上回るほどとなったのである。

以上から、次の特徴を挙げることができる。分析期間中全体の概観から、福井県織物業のなかでも、絹織物業が中心的存在であったことは明らかである。1910年代における福井県織物業の特徴は、「福井県織物業＝絹織物業」と言える。しかし、1920年代前半には絹織物業の割合が減少し、「福井県織物業＝絹織物業」が揺らいだと言えよう。1930年代には、福井県織物業は絹織物業へ完全に傾倒し、「福井県織物業＝絹織物業」となった。言い換えれば、絹織物業を中心に発展してきた福井県織物業にとって、1920年代は構造変化の時期であった。

#### 小括

1910年から1930年代にかけて、福井県経済を牽引してきたのは工業であり、なかでも織物業の割合が非常に大きく、福井県全体の総生産額の約半分を占めていた。この事実から、織物業が当時の福井県経済にとって重要な産業であったと位置づけられる。その織物業においては、第一次世界大戦の勃発による輸出主導の好況があり、生産額や機業戸数等の急激な増加がみられた。しかし、その好況が1920年に終わり、織物業は未曾有の不況に陥った。激しい景気変動に見舞われた福井県織物業を地域別にみると、坂井郡と大野郡が最も福井県織物業の動向を示す代表的な地域であった。1920年代の不況期において、福井県織物業に変化が訪れた。それは、当該期における絹織物業の地位の低下であった。福井

絹織物業が明治期から絹織物業（なかでも輸出羽二重）を軸に目覚ましい発展を遂げたことと、1930年代に福井県織物業が再び絹織物業に集中した事実を鑑みると、1920年代は福井県織物業にとって構造変化の時期であったと推察される。そこで次章では、福井県織物業における構造変化を絹織物業に焦点を当てて観察する。

## 第2章 1920年代における構造変化の特徴（絹織物業を対象にして）

### 第1節 福井県絹織物業の変容

本節では、福井県織物業の主力であった絹織物業に注目する<sup>25</sup>。結論を先取りすれば、福井県織物業の主力製品であった輸出羽二重は、1918年から頭打ちとなり、1920年を境にしてそれは決定的となった。輸出羽二重の頭打ちが露呈する一方で、縮緬や富士絹、絹紬といった絹製品、いわゆる「変わり織物」が盛んに生産され、絹織物業の内部における製品の多様化が窺える。なかには、絹織物業から綿織物業に転向する者も存在した。製品の多様化によって不況期を耐え抜き、福井県は1920年代後半から人絹織物の生産に移行したことを契機にし、「人絹王国」と称されるほどの全国有数の織物産地に返り咲いた<sup>26</sup>。

まず、第7図から絹織物業の主要製品であった輸出羽二重の位置づけの変化をみてみよう。輸出羽二重の割合は、1910年から1917年にかけて80%後半ないし90%前半を占めていたが、1918年から1920年にかけて70%台に下落した。この下落の理由は、1918年頃から縮緬や富士絹ならびに絹紬等の「変わり織物」が生産され始めたためである<sup>27</sup>。1921年には約5割へシェアを縮小し、それ以後も輸出羽二重の割合は着実に下がっていた。この縮小に大きく関係していたのは、アメリカにおける嗜好の変化であった。絹織物の仕向地（米国、英国、カナダ等）を調査した岩下龍太郎と安本次郎は、「従来羽二重は重に衣物の裏地に用いられる戦時中其賣行増加えるは米國婦人が羽二重製 *Walst coat*（胴衣）を使用する流行に遷りしが爲なり然るに近來は嗜好の變遷に因り *Onepiece dress* とて上下一枚の衣物が流行し *Waist coat* 着用の要なく多く裏なしとなり偶裏を付くるとするも羽二重を用ひず縮緬を用ひることの事なり（後略）」（原文まま引用）と、アメリカで低下しつつあった輸出羽二重への需要の様子を記した<sup>28</sup>。すなわち、アメリカにおける需要減少が、輸出羽二重の頭打ちに関係していたと考えられる<sup>29</sup>。その傾向は続き、1930年代に入ると輸出羽二重の割合は10%以下を推移していた。1910年から1930年代までを長期的に観察すると、輸出羽二重が絹織物業の主要製品ではなくなったことが明白であり、それは1920年を境に顕著となったと言える。

第8図は、輸南向製品だった羽二重の退潮によって、1920年代に福井県の絹織物が内地向製品へシフトし始めた事実を示している。輸出羽二重が絹織物業の主力製品だった1910年代において、輸南向製品のシェアは8割以上を占めていたが、1921年には内地向製品の割合が拡大した。1922年から1928年にかけて輸南向製品が回復するものの、1910年代の水準に回復することはなかった<sup>30</sup>。その後、1929年から内地向製品のシェアは、再び高まり始めた<sup>31</sup>。

さらに 1920 年代は不況色が濃く、機業にも影響を与えていたのも事実である<sup>32</sup>。福井県織物同業組合は、不況期における福井県織物業を「(前略) 不況來は最も深刻にして爲に本縣織物業界の中樞たる福井縣織物同業組合當事者に於ても對症すべくあらゆる方面に活路を求めて之が難局打開に一入焦慮せられたる結果或は支那生糸の輸入となり或は新纖維による新規織物の研究となり日も尚足らざるの有様なりき」(原文まま引用)と回顧している<sup>33</sup>。さらに「(前略) 大正八年歐洲大戰終熄後世界經濟の大動亂に依り、生糸及輸出絹織物の慘落の難局に遭遇し、生糸及絹織物の輸出は全く杜絶にて、業者の打撃著しく破産状態に陥りたるものあり 此の時に當り、従來の絹織物業者の綿織物製造に轉向するもの多く、(後略)」(原文まま引用)と福井県織物同業組合は振り返っている<sup>34</sup>。この史料からは、一部の絹織物業者が綿織物製造に向かったことも窺える<sup>35</sup>。いずれの史料からも、1920 年代の不況が福井県織物業ならびに絹織物業界へ大打撃を与えたことが分かる。

第 9 図は、1910 年から 1936 年までの絹織物業の長期的な動向を示したものである。1922 年から 1929 年にかけて織物生産額と絹織物生産額の間にある、大きな隔たりは、第 1 章第 3 節ですでに指摘した通り、1920 年代において福井県織物業に対する絹織物業のシェアが縮小したことの表れである。絹織物業のシェアが縮小した頃に、輸出羽二重と輸出縮緬・璧の生産額が減少し、一方で富士絹と絹紬が生産額を伸ばし始める<sup>36</sup>。富士絹と絹紬の生産額は、1922 年から 1925 年にかけて増加した。特に 1925 年における富士絹と絹紬の生産額は、同年の輸出羽二重の生産額を超え、1926 年には 40 万円ほどを上回っている。輸出縮緬・璧は、1922 年から 1923 年にかけて大幅に減少するものの、1924 年から増加傾向となり 1928 年に 1,266 万円へ達した。つまり、輸出羽二重の退潮を経験した 1920 年代の絹織物業では、富士絹や絹紬等の「変わり織物」が盛んに生産されるようになったのである。このように絹織物業は、製品の多様化によって 1920 年代前半を乗り切ったのである。そのようななかで、人絹織物の生産が開始された。それは 1920 年代後半に生産が盛んになり、福井県織物業全体の生産額を増加させることとなった<sup>37</sup>。

福井県織物業の中心的存在だった絹織物業は、1920 年代に構造変化を迎えた。特に絹織物業が輸出羽二重を主要製品としてきたことを考慮すると、羽二重の退潮と製品の多様化は絹織物業にとって著しい変化だったと言える。次節では、絹織物業を機業戸数ベースで観察し、時期ごとの特徴を抽出する。次節でも、1920 年代における福井県織物業の構造変化を具体的に明らかにすることを試みる。

## 第 2 節 規模別にみた機業戸数の動向

ここでは、第 10 図から第 12 図を用いて、絹織物業における機業戸数の動向を規模別に観察し、1920 年代の経済状況が福井県織物業にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにする。本節での分析は、先行研究において欠落していた部分である。ここでは、統計指標の検討を進めることを中心にして、そこから浮かび上がってくる事実を整理したい<sup>38</sup>。

第 10 図から、福井県における絹織物業の機業戸数の動向を確認する。まず、機業戸数の

分類について説明を加える。図表作成のために資料である『福井縣統計書』では、1922年を境にして機業規模の基準が職工数ベースから織機数ベースに変更されている。そのため、分類の基準については、筆者が独自に定めることによって、できるだけ系列を繋げるようにした。1915年から1921年においては、「賃織」、「織元」、「職工数10人未満」の3つを「小規模」に、「職工数10人以上」を「中規模-大規模」に分類した。1922年から1936年においては、「織機数5台未満」、「織機数10台未満」の2つを「小規模」に、「織機数50台未満」を「中規模」に、「織機数50台以上」を「大規模」に分類した。

1915年における福井県の機業戸数の内訳は、「小規模」が圧倒的に多く、次に「中規模-大規模」の順となっていた。機業戸数は、輸出主導の好況を経て1919年に「小規模」が1,785戸、「中規模-大規模」が663戸へ増加した。しかし、不況を迎えると全体の機業戸数は、1920年から減少傾向となった。全体の機業戸数は、1919年から1924年までの5年間で約3分の1に減少した。この減少の動向は規模によって異なり、特に「小規模」と「中規模」の間に相違が見られる。「中規模」の減少は1923年に底打ちとなり、1924年から一貫した増加傾向になった。それに対して、「小規模」の減少傾向は1926年まで続き、以後4年間に停滞傾向にあり、その後1931年から漸く増加傾向となった<sup>39</sup>。機業規模の構成にも変化があり、1910年代後半は、「小規模」が大半を占めていたが、不況を経た1920年代以降には、「中規模」が最も多くを占めるようになった。これらが福井県の特徴として挙げられる。さらに、大規模経営も特に1930年代には、一定数存在したこともわかる。次に、第1章第2節で福井県織物業を代表する地域として挙げた、坂井郡と大野郡を対象にして分析する。

坂井郡の機業戸数を示す第11図をみてみよう、福井県の動向と異なり、1910年代後半における坂井郡の機業規模の構成は、「中規模-大規模」が多くを占めていたことが分かる。坂井郡の機業戸数は、1919年に向かって増加し、それから一転して、1920年頃から減少し始めた<sup>40</sup>。しかし、1925年には各規模別の機業戸数は増加傾向となった。なかでも「小規模」の増加傾向は、県のそれと比較すると早かったことが指摘される。

大野郡の機業戸数の動向を示す第12図から、大野郡における1910年代後半の構成は「小規模」が大多数を占め、県の動向とほぼ一致していることが分かる。県の動向と同様に、いずれの規模も1919年にかけて増加し、1920年代に減少する。「小規模」は、1923年から1925年までの増加傾向を除けば、1928年まで減少傾向であった<sup>41</sup>。その「小規模」の増加は、1929年から始まった。それに対して「中規模」は、「小規模」よりも早く、1924年から一貫した増加傾向を辿った。また、大野郡における1920年代以降の機業規模別構成は、「中規模」が多くを占め、次に「小規模」が位置している。その点も福井県の動向と酷似している。

ここまでの検討を以下に整理しておこう。福井県における機業戸数の構成は、1920年頃を境にして一変する。つまり1910年代後半に「小規模>中規模-大規模」、1920年代以降に「中規模>小規模>大規模」となったのである。また1920年代における「小規模」と「中規



模」の間に、機業戸数の増加ならびに回復の時期に時差が生じていたことも指摘される。特に大野郡は、これらの福井県の特徴を有す地域として位置づけられよう。

#### 小括

本章では、前章で指摘した 1920 年代における福井県織物業の構造変化の具体的な内容を確認することができた。福井県織物業の中心を担っていた絹織物業には、1920 年代に数々の変化があった。絹織物業は、明治中期から輸出羽二重を軸に発展を遂げてきたが、1920 年代前半においてそれは頭打ちとなった。主力製品を失った絹織物業は「変わり織物」の生産、つまり製品の多様化によって 1920 年代を乗り切った。数量データによる裏付けは不完全であるが、絹織物業者のなかには綿織物業に転向した事実も明らかになった。機業戸数の観点から絹織物業を検討してみると、1910 年代後半と 1920 年代以降で、規模別構成が変化していたのも事実である。これらの特徴から福井県織物業は、1920 年代に構造変化を起こしたと十分に言えるだろう<sup>42</sup>。

#### 終章

ここまで、1910 年代から 1920 年代にかけて福井県織物業の動向を『福井縣統計書』を素材に整理してきた。絹織物業を中心に発展を遂げてきた福井県織物業は、第一次大戦を契機とした好況の下、輸出を伸ばした。しかし、1920 年恐慌を境に未曾有の不況に陥った。その間、福井県織物業に対する絹織物業の地位が低下して、福井県織物業は構造変化を遂げることとなった。その絹織物業の内部でも諸変化があり、その 1 つとして絹織物業の主要製品であった輸出羽二重の生産の激減が挙げられた。それは米国における需要の変化を発端とし、1918 年頃からその退潮が始まった。1920 年恐慌が追討ちを掛けるようにして、輸出羽二重は福井県織物業ならびに絹織物業においてその地位を落した。それと付随して、絹織物の仕向地は輸南向から内地向へと徐々に転換していったのである。さらに、絹織物業の生産額を検討すると、1920 年代に富士絹や絹紬といった「変わり織物」の生産が盛んになっていたことが明らかになった。1930 年代には福井県が「人絹王国」と称されるほどの発展を遂げる。輸出羽二重から人絹織物への過渡期として、絹織物業は 1920 年代に様々な変化を遂げていたのである。

---

1 神戸大学大学院経済学研究科博士前期課程在籍。

2 本文中に触れることができなかった先行研究を以下に挙げておく。原田政美（1995）「輸出羽二重精練業法の分析-営業の自由と独占を中心にして-」、『福井県立大学論集』第 6 号、183~198 頁。同（1996）「福井県における羽二重精練業の合同過程-営業の自由と独占を中心にして-」、『福井県立大学経済経営研究』創刊号、77~87 頁。同（2002）「明治・大正期羽二重の流通-社と産業組合」、『地域公共政策研究』第 6 号、25~36 頁。富澤修身（2005）「福井繊維産地の構造調整史-産業集積のダイナミズムの分析-」、『経営研究』56 卷 3 号、17~44 頁。木村亮（2002）「福井織物産業集積における『テクノロジー空間』の形成-力織機導入期の福井県工業試験場を中心に-」、『地域公共政策研究』第 6 号、1~24 頁。木村亮（2005）「福井人絹織物産地の確立過程」、『福井県文書館研究紀要』第 2 号、39~71 頁。橘

野知子 (2012) 「近代福井県における輸出向絹織物業の急成長と地理的拡大」、『国民経済雑誌』第 206 号第 2 巻, 77~100 頁。Tomoko Hashino and Kejiro Otsuka (2015) ‘The Rise and Fall of Industrialization and Changing Labor Intensity: The Case of Export-Oriented Silk Weaving District in Modern Japan’, Discussion Paper No.1501, Graduate School of Economics Kobe University.

<sup>3</sup> 石井寛治 (1965) 「絹織物輸出の発展」, 横浜市編・発行『横浜市史第四巻上』, 305~396 頁。

<sup>4</sup> 神立春樹 (1974) 『明治農村織物業の展開』, 東京大学出版会。

<sup>5</sup> 石井寛治 (1974) 「福井・石川絹織物業と金融」, 山口和雄編『日本産業金融史研究 織物金融編』, 東京大学出版会, 661~751 頁。

<sup>6</sup> 橋野知子 (2007) 『経済発展と産地・市場・制度・明治期絹織物業の進化とダイナミズム』, ミネルヴァ書房。

<sup>7</sup> 山崎広明 (1975) 『日本化繊産業発達史論』, 東京大学出版会。

<sup>8</sup> 春日野道治 (2002) 「昭和初期における福井県人絹織物業について」, 『地域公共政策研究』第 6 号, 50~68 頁。

<sup>9</sup> 笠松雅弘 (1991) 「昭和戦前期の人絹織物業と勝山地域」, 『福井県立博物館紀要』第 4 号, 75~94 頁。

<sup>10</sup> 「鉦工業」の中でも「鉦産」の割合は非常に低く、「工産」がほとんどを占めている。

<sup>11</sup> 笠松 (1991) は、県内に人絹織物が浸透するにつれて新興の機業地が生まれたことを大野郡北郷村の事例から実証している。

<sup>12</sup> 1914 年の急落については、本節で若干の解説を加える。

<sup>13</sup> 生産額ベースだけでなく、職工数や機業戸数の変化にかかわる分析については、今後の課題としたい。

<sup>14</sup> 福井県編・発行 (1994) 『福井県史 通史編 5 近現代一』, 889 頁。

<sup>15</sup> 1921 年に 582 万円にまで回復するが、その原因は現在不明である。

<sup>16</sup> この点については、福井県編・発行 (1994) 『福井県史 通史編 5 近現代一』 899 頁で指摘されている。同書では、その事実を絹織物業について言及している。

<sup>17</sup> 大阪毎日新聞 (1920 年 4 月 24 日付) 「機業打撃の真相」による。当該期における福井県織物業への打撃の理由は、国内外を問わない複合的なものであったと考えられる。それについて本研究の範囲を超えるため、今後の課題としたい。

<sup>18</sup> 福井縣織物同業組合編・発行 (1937) 『五十年史』 8 頁。

<sup>19</sup> 足羽、丹生、南條は 1910 年から 1936 年にかけて 10%にも達していないため、除外した。

<sup>20</sup> この事実は神立春樹 (1974) でも指摘され、1900 年には既に郡部のシェアが福井市を抜いていた。橋野知子 (2012) でも、同様の指摘がされている。

<sup>21</sup> 今立郡における 1920 年代前半の伸びの要因は、不明である。

<sup>22</sup> 1921 年の急速な回復の理由については、明らかになっていない。

<sup>23</sup> 織物業を「絹織物」、「絹綿交織物」、「綿織物」、「麻織物」、「毛織物」、「その他」の 6 つに分類した。「その他」には「特殊織物」と「ステープルファイバー織物」が含まれる。

<sup>24</sup> 福井市編・発行 (1981) 『福井市史 通史編 近現代』に麻織物に関する記述は、確認されなかった。この現象の分析は今後の課題となる。機業戸数の急増の理由に、麻織物製品の大部分は軍需品であったため、第一次大戦が勃発すると爆発的に供給が伸びることが挙げられるだろう。また麻織物の景況が戦争に左右されるため、工場生産は不向きで、家内工業が主流の生産体制であった (『報知新聞』1930.9.18~1930.9.26 「麻織物」より)。実際に福井県、なかでも足羽郡で急増したのは賃織であった。

<sup>25</sup> 本節で指摘される事実の大半は、セーレン株式会社百年史編集委員会編 (1990) 『セーレン百年史 新たな飛躍・新たな挑戦』, セーレン株式会社発行でも明らかにされている。

<sup>26</sup> 福井県編・発行 (1996) 『福井県史 通史編 6 近現代二』, 163~165 頁。なお本稿では

---

「人絹王国」成立過程をほとんど取り上げない予定である。

27 セーレン株式会社百年史編集委員会編（1990）『セーレン百年史 新たな飛躍・新たな挑戦』、セーレン株式会社発行、65 頁。

28 岩下龍太郎・安本次郎（1927）『欧米市場に於ける本邦絹織物調査報告』福井県織物同業組合発行、39 頁。

29 輸出向産品だった羽二重の事例から、海外の需要に織物産地の景況が左右されていたことが分かる。つまり福井産地は、国内だけでなく国外の状況に左右されていたと推察される。

30 輸出向製品の回復の明確な理由は、明らかにされていない。縮緬や富士絹、絹紬が輸出向の一時的な伸びに寄与したことが観測される。

31 第 8 図は生産額を参考に作成されているため、生産量については不明である。生産額ベースとは異なる結果になる可能性もある。また、県内の絹織物業が徐々に内地向へシフトした理由については、明らかになっていない。これは今後明らかにすべき課題である。

32 その指摘は次節の機業戸数の動向にて言及する。

33 前掲『五十年史』292 頁。引用史料にある「福井縣織物同業組合當事者」は福井県織物同業組合に属する者を指していると思われる。

34 前掲『五十年史』99 頁。

35 この事実を示す決定的な資料を持ち合わせていないが、第 1 章第 3 節で示した第 1 表は、その参考になるだろう。

36 富士絹の原料は絹紡糸で、主な輸出先はオーストラリアである。絹紬の原料は柞蚕糸で、主な輸出先はアメリカである。

37 福井県織物業における人絹織物生産の経緯は春日野（2002）によって整理されている。ちなみに人絹糸の研究は大正 5 年から既に福井縣工業試験場によって開始されていた。

38 また、1920 年代における経済状況と福井県織物業の関係性を究明する一端を担っている。

39 小規模と中規模の間に増加の時期に時差が生じたのは、興味深い結果である。つまり当時の経済状況がこの時差を生んだと評価されうる。その経済状況の検証は今後の課題としたい。

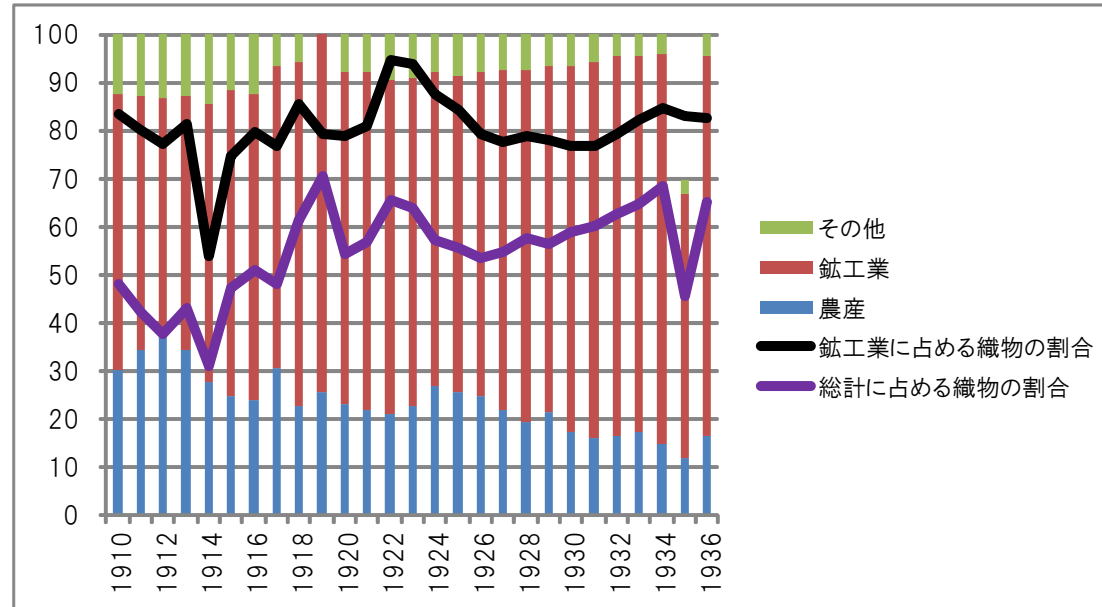
40 小規模の減少が他に比べて遅れた理由は、現在のところ不明である。

41 1923 年から 1925 年の間に増加した理由は定かでない。

42 しかし、機業を取り巻く商人や金融機関といった諸関係機関についての論証や、当該期の経済状況が福井県織物業にいかなる影響を及ぼしたのかについては、本稿でほとんど触れられていない。これらは、今後の課題である。

図表一覧

第1図 福井県の産業構造と織物業の位置(%)



(資料)

・福井縣編・発行『福井縣統計書』(1917年版、1923年版、1931年版、1941年版)。

(注)

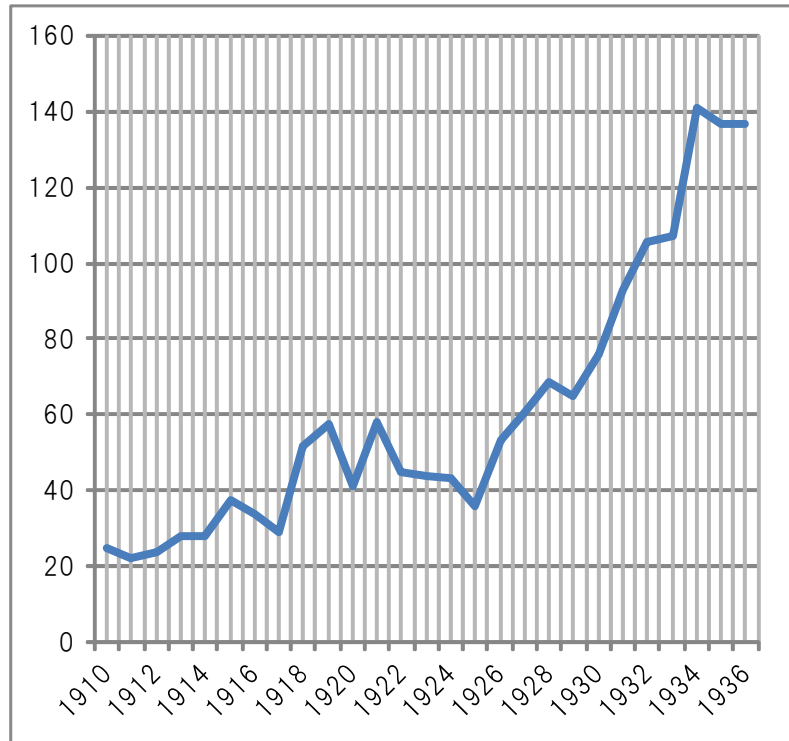
・「その他」には「畜産」、「水産」、「林産」、「蚕糸業」(1910年～1916年)の4部門が含まれる。

・1914年、1919年、1935年の各値に異常が見られるが資料通りに掲載した。

・特に1935年の値は統計書の誤りと思われる。

図表一覧

第2図 福井県における織物生産額の動向(100万円)



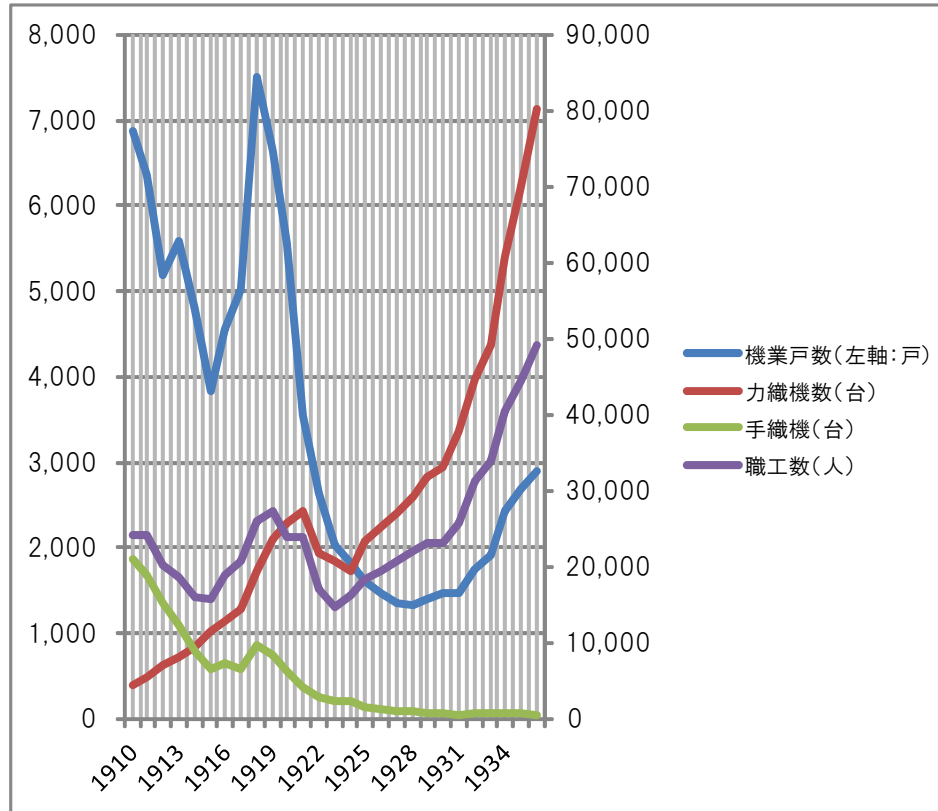
(資料)

・福井県編・発行『福井県統計書』(各年版)。

・大川一司他(1967)『長期経済統計 8 物価』, 第15表「工業製品、鉱産物および鉱工業物価指数」にある「繊維」価格指標によって実質化した。

図表一覧

第3図 福井県織物業における各種指標の動向

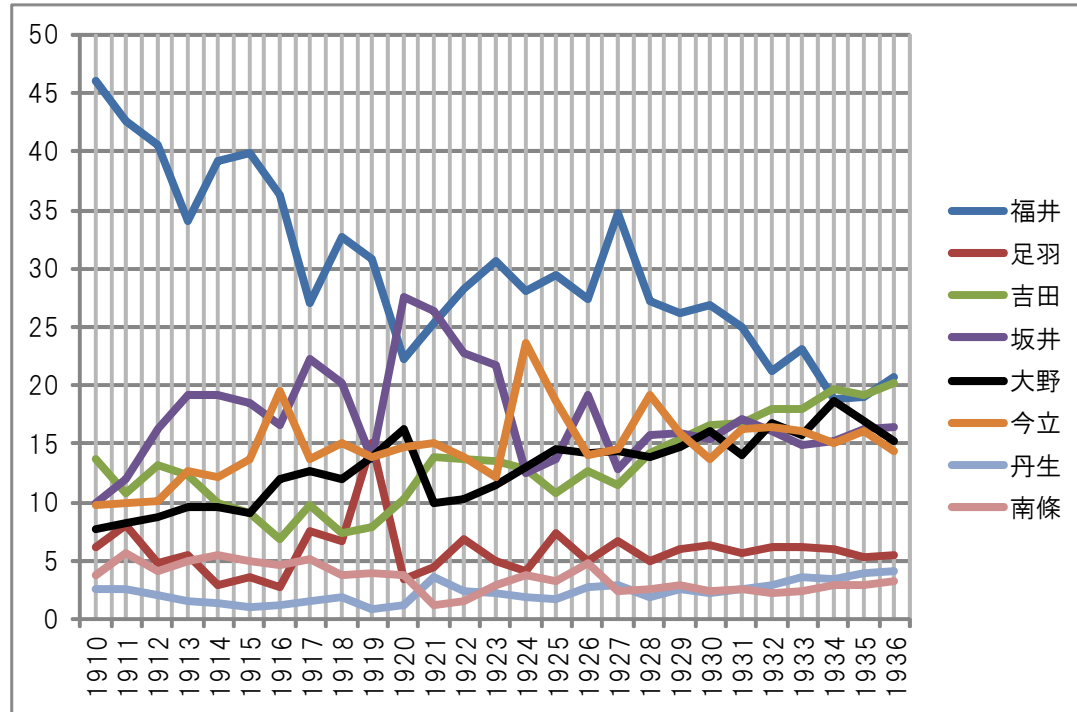


(資料)

福井縣編・発行『福井縣統計書』(各年版)。

図表一覧

第4図 福井県における地域別の織物生産(生産額ベース, %)

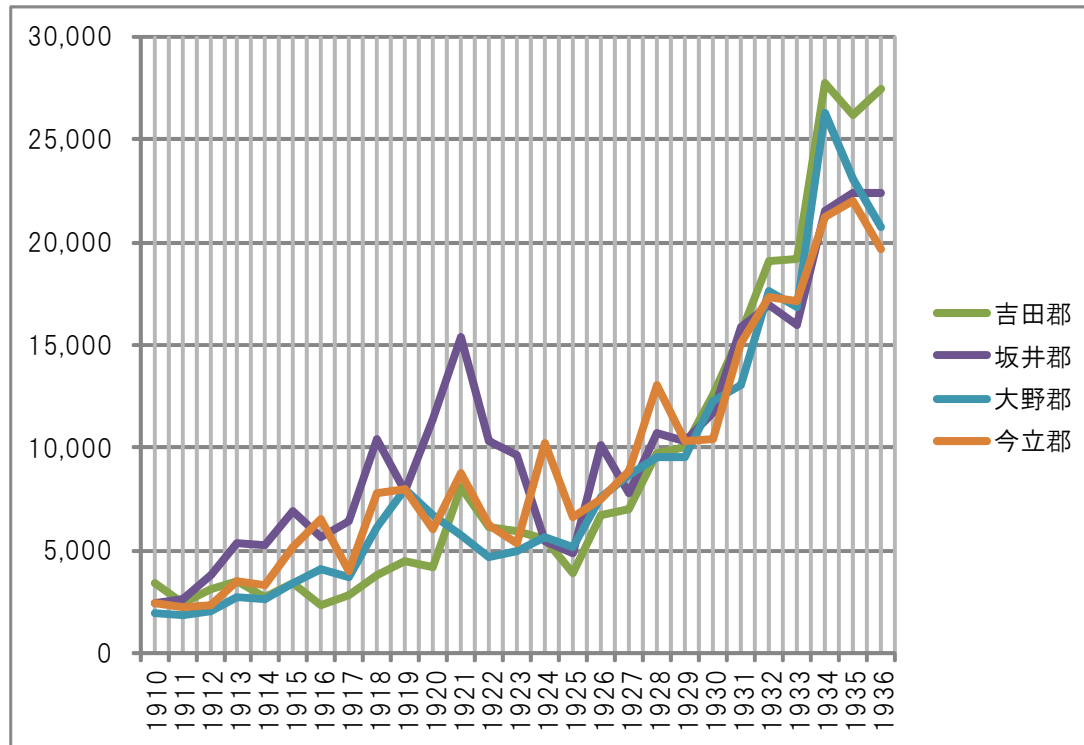


(資料)

・福井県編・発行『福井縣統計書』(各年版)。

図表一覧

第5図 福井県織物業主要4地域における実質生産額の推移(千円)



(資料)

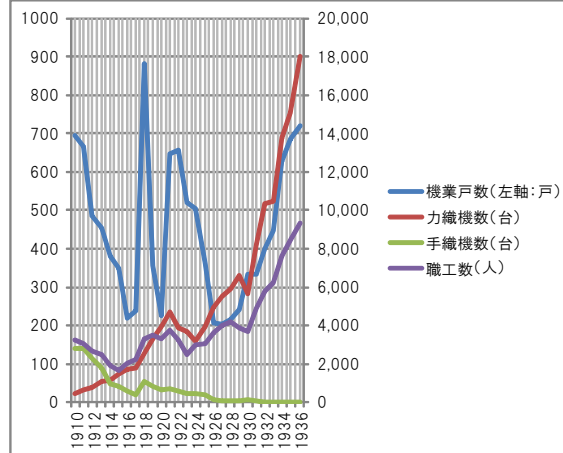
・福井縣編・発行『福井縣統計書』(各年版)。

・大川一司他(1967)『長期經濟統計 8 物価』, 第15表「工業製品、鉱産物および鉱工業物価指数」にある「繊維」価格指標によって実質化した。

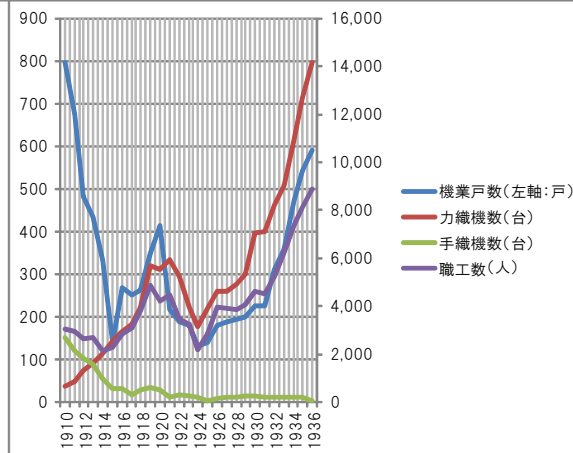


図表一覧

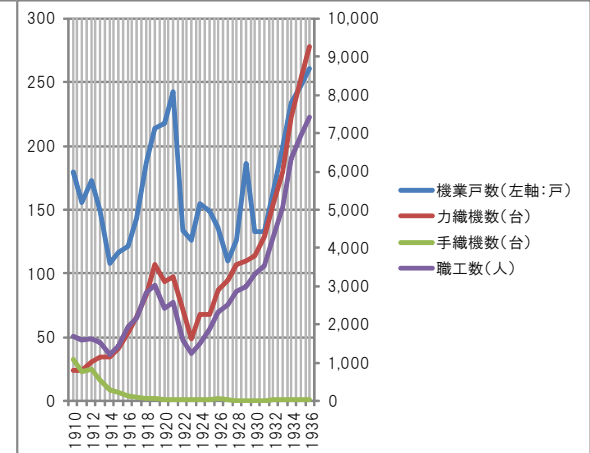
第6図 吉田・坂井・大野郡における織物業の各種指標の動向  
吉田郡



坂井郡



大野郡



(資料)

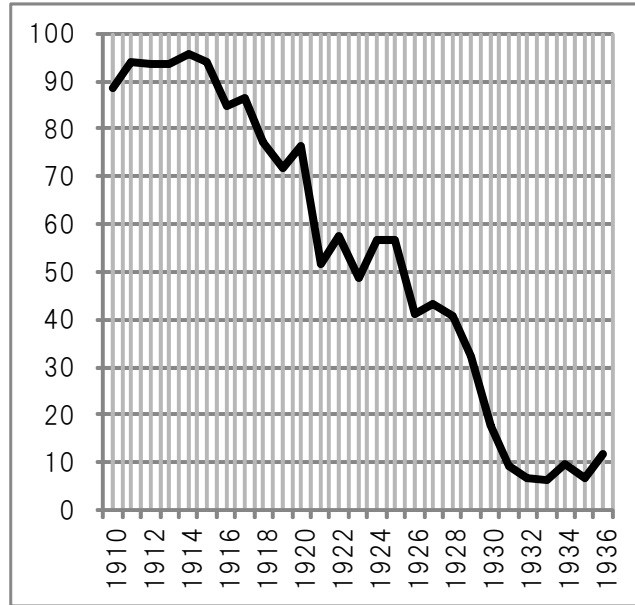
・福井県編・発行『福井縣統計書』(各年版)。

(注)

・各郡における指標の動向を観察したい為、各郡の規模の相違については今回取り上げない。

図表一覧

第7図 福井県絹織物業における輸出羽二重の割合の変化(生産額ベース, %)



(資料)

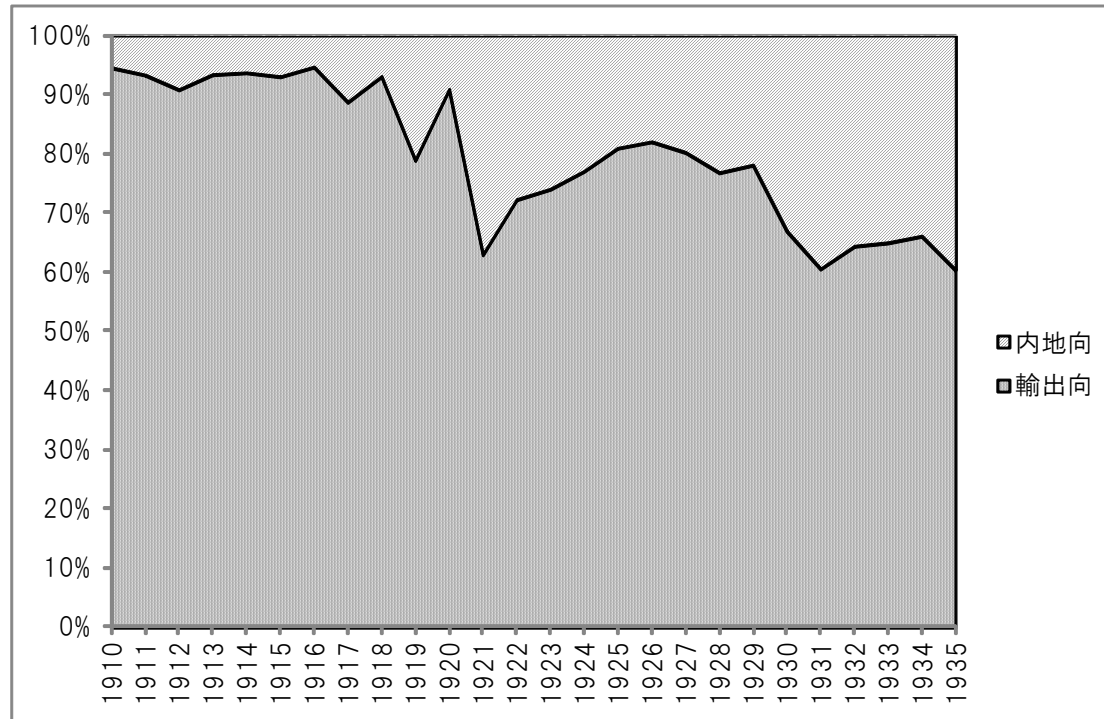
・福井県編・発行『福井縣統計書』(各年版)。

(注)

・輸出羽二重の割合を絹織物総生産額を輸出羽二重生産額を除いて、輸出羽二重の割合を算出した。

図表一覧

第8図 絹織物業における輸出向・内地向製品の生産額の割合

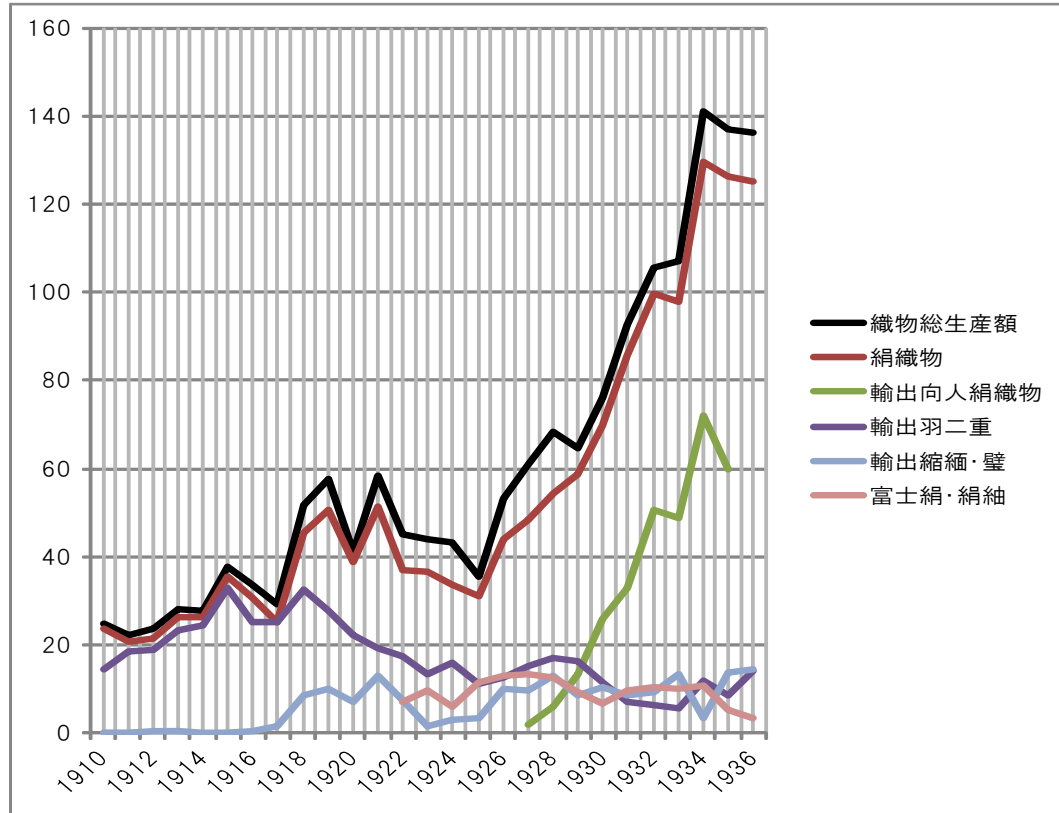


(資料)

・福井県織物同業組合編・発行(1937)『五十年史』,「自明治廿五年至昭和十年輸出向及内地向絹織物年別生産高表(福井織物同業組合調)」。

図表一覧

第9図 絹織物実質生産額の動向とその内訳(100万円)



(資料)

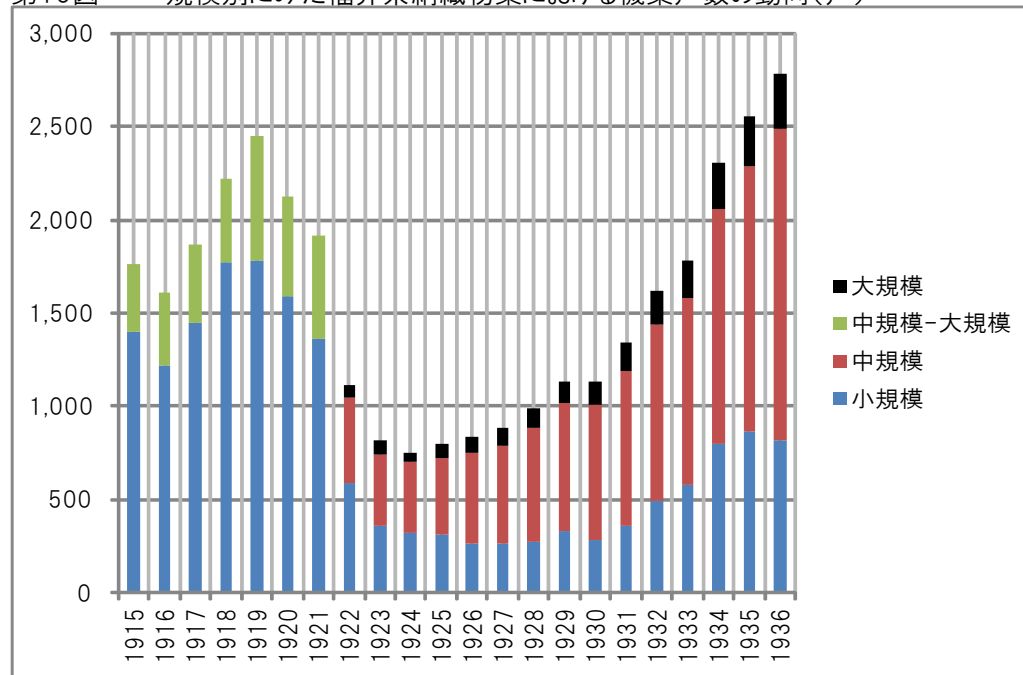
- ・福井縣編・発行『福井縣統計書』(各年版)。
- ・大川一司他(1967)『長期經濟統計 8 物価』, 第15表「工業製品、鉱産物および鉱工業物価指数」にある「繊維」価格指標によって実質化した。
- ・福井県織物同業組合編・発行(1937)『五十年史』内「自昭和二年至昭和十年輸出入造絹織物年別生産見積價額表」。

(注)

- ・「輸出向人絹織物」の値は福井縣織物業同業組合編・発行(1937)『五十年史』, 10頁による。

図表一覧

第10図 規模別にみた福井県絹織物業における機業戸数の動向(戸)



(資料)

福井県編・発行『福井県統計書』(各年版)

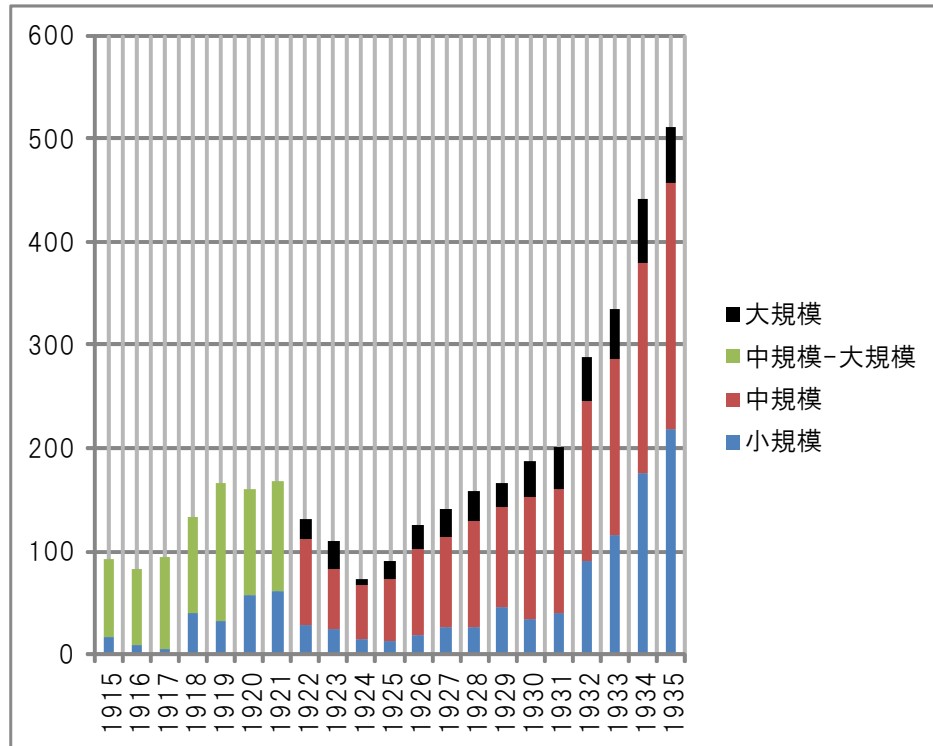
(注)

・筆者による機業戸数の規模別分類は、以下のとおりである。

	1915-1921(職工数ベース)	1922-1936(織機数ベース)
大規模		織機数50台以上
中規模		50台未満
大規模・中規模	10人以上	
小規模	賃織、織元、10人未満	5台未満、10台未満

図表一覧

第11図 規模別にみた坂井郡絹織物業における機業戸数の動向(戸)



(資料)

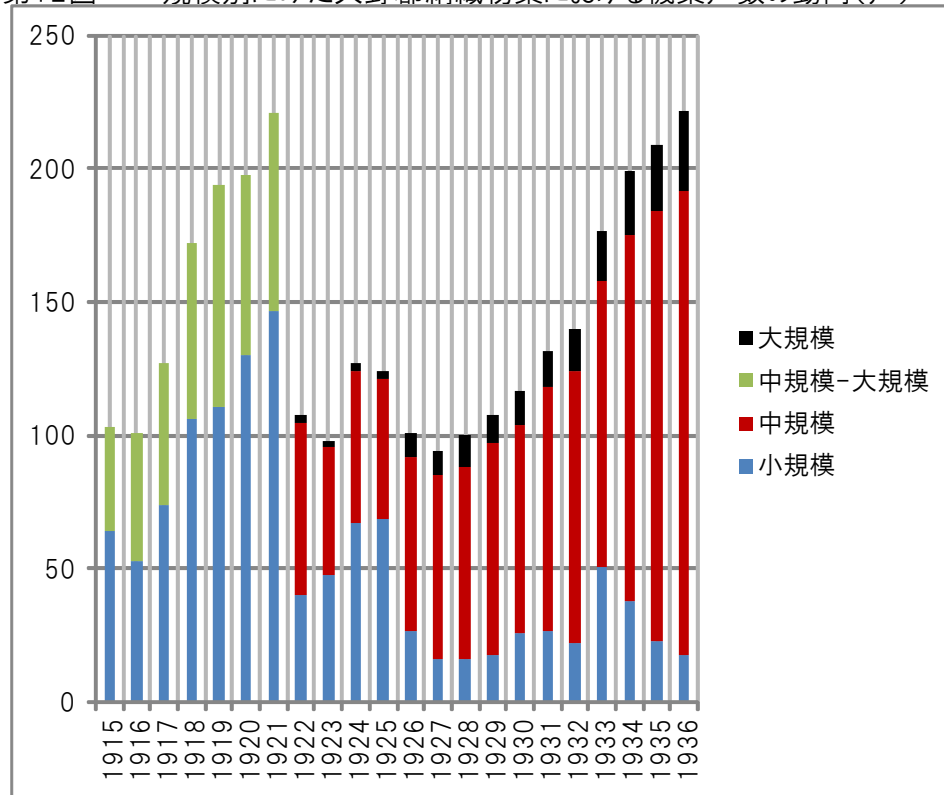
福井縣編・発行『福井縣統計書』(各年版)

(注)

・機業戸数の規模別分類は、第10図と同じである。

図表一覧

第12図 規模別にみた大野郡絹織物業における機業戸数の動向(戸)



(資料)

福井縣編・発行『福井縣統計書』(各年版)

(注)

・機業戸数の規模別分類は、第10図と同じである。

図表一覧

第1表 製品別にみた各種指標の動き(%)

	機業戸数					職工数					総枚数					生産額								
	総織物	綿織交織物	綿織物	麻織物	毛織物	その他	総織物	綿織交織物	綿織物	麻織物	毛織物	その他	総織物	綿織交織物	綿織物	麻織物	毛織物	その他	総織物	綿織交織物	綿織物	麻織物	毛織物	その他
1910	71.1	-	13.2	15.5	0.1	0.0	87.6	-	6.0	4.8	1.6	0.0	88.0	-	5.7	4.6	1.8	0.0	95.1	1.8	1.2	1.0	1.0	0.0
1911	73.8	-	13.8	12.2	0.2	0.0	88.6	-	5.8	4.1	1.5	0.0	88.7	-	5.8	3.9	1.6	0.0	92.0	3.5	1.3	1.3	1.9	0.0
1912	62.2	-	17.2	20.3	0.2	0.0	85.0	-	6.3	5.9	2.7	0.0	85.8	-	6.1	5.5	2.6	0.0	91.5	3.5	1.3	1.0	2.7	0.0
1913	51.6	-	16.5	31.8	0.1	0.0	81.5	-	6.9	10.2	1.4	0.0	82.5	-	6.8	9.3	1.5	0.0	93.0	2.6	1.1	1.2	2.1	0.0
1914	49.4	-	14.8	35.7	0.1	0.0	80.8	-	6.3	11.3	1.6	0.0	82.7	-	6.2	9.8	1.2	0.0	92.3	3.1	1.9	2.7	0.0	0.0
1915	47.1	-	11.7	41.1	0.1	0.0	80.7	-	6.5	11.5	1.3	0.0	83.5	-	5.2	9.7	1.5	0.0	94.2	2.4	1.1	1.5	0.8	0.0
1916	37.2	-	20.6	42.1	0.1	0.0	77.3	-	10.9	11.4	0.4	0.0	79.3	-	9.7	10.6	0.4	0.0	91.4	5.3	2.3	1.0	0.1	0.0
1917	39.5	-	16.9	43.7	0.0	0.0	76.0	-	12.3	11.8	0.0	0.0	80.4	-	7.2	12.4	0.0	0.0	86.4	6.1	5.9	1.6	0.0	0.0
1918	31.9	-	12.4	55.7	0.0	0.0	72.9	-	10.6	16.6	0.0	0.0	76.5	-	8.5	15.0	0.0	0.0	87.9	3.1	4.5	4.5	0.0	0.0
1919	40.8	-	10.0	49.1	0.0	0.0	78.3	-	9.0	12.7	0.0	0.0	80.9	-	7.9	11.1	0.0	0.0	88.0	3.3	7.6	1.2	0.0	0.0
1920	41.0	-	8.0	50.9	0.0	0.0	79.2	-	8.1	12.7	0.0	0.0	83.4	-	7.0	9.7	0.0	0.0	94.0	2.7	2.0	1.4	0.0	0.0
1921	57.9	-	6.3	35.7	0.0	0.0	87.0	-	6.7	6.1	0.2	0.0	88.4	-	6.6	4.9	0.1	0.0	87.9	5.2	5.5	1.3	0.2	0.0
1922	42.0	-	12.1	42.4	0.0	3.5	71.1	-	16.7	9.3	0.0	2.9	76.2	-	14.9	6.8	0.0	2.1	82.4	4.9	9.1	3.0	0.0	0.6
1923	39.8	-	14.5	42.6	0.2	2.9	77.9	-	5.7	10.0	3.1	3.3	70.0	-	18.7	7.1	2.2	2.0	83.2	4.0	8.6	2.2	1.4	0.6
1924	42.0	-	14.6	39.7	0.3	3.3	62.9	-	24.1	7.8	2.3	2.9	68.4	-	20.2	7.4	1.9	2.2	78.0	10.3	7.1	2.2	2.0	0.5
1925	49.6	-	19.4	30.7	0.3	0.0	64.9	-	26.5	5.1	1.3	2.2	67.8	-	25.1	5.1	1.4	0.8	87.1	3.2	3.2	5.2	0.6	0.7
1926	57.2	-	22.0	20.7	0.1	0.0	74.5	-	21.0	4.3	0.1	0.0	73.1	-	23.0	3.8	0.1	0.0	82.5	3.8	11.5	1.8	0.5	0.0
1927	65.2	-	20.3	14.4	0.1	0.0	78.4	-	17.9	3.4	0.3	0.0	77.9	-	18.7	3.2	0.2	0.0	79.3	9.7	8.9	1.9	0.3	0.0
1928	74.6	-	16.2	9.1	0.2	0.0	86.9	-	10.6	2.3	0.1	0.0	86.4	-	11.2	2.2	0.2	0.0	79.7	12.6	6.1	1.6	0.1	0.0
1929	84.7	-	10.7	4.5	0.1	0.0	90.2	-	8.0	1.6	0.1	0.0	90.4	-	8.0	1.4	0.1	0.0	90.7	3.1	4.3	1.8	0.1	0.0
1930	90.8	-	8.2	0.9	0.1	0.0	93.8	-	5.4	0.8	0.0	0.0	93.1	-	5.8	1.1	0.0	0.0	91.9	3.1	3.8	1.2	0.0	0.0
1931	90.8	-	8.2	0.9	0.1	0.0	95.3	-	4.0	0.6	0.1	0.0	94.3	-	4.7	0.9	0.1	0.0	92.3	3.3	3.0	1.4	0.0	0.0
1932	93.0	-	4.9	2.1	0.0	0.0	95.9	-	3.5	0.6	0.0	0.0	95.6	-	3.7	0.7	0.0	0.0	94.2	2.3	2.4	1.1	0.0	0.0
1933	93.8	-	4.3	1.9	0.0	0.0	96.1	-	3.4	0.6	0.0	0.0	96.3	-	3.0	0.7	0.0	0.0	91.4	5.0	2.7	0.8	0.0	0.0
1934	94.8	-	3.1	2.1	0.0	0.0	96.5	-	2.9	0.6	0.0	0.0	96.7	-	2.7	0.6	0.0	0.0	92.0	5.3	1.9	0.9	0.0	0.0
1935	95.2	-	2.8	2.0	0.0	0.0	95.8	-	3.5	0.8	0.0	0.0	96.3	-	3.1	0.6	0.0	0.0	92.3	4.5	2.1	1.1	0.0	0.0
1936	96.1	-	2.2	1.7	0.0	0.0	96.2	-	3.2	0.7	0.0	0.0	96.8	-	2.6	0.5	0.0	0.0	91.8	4.2	2.9	1.1	0.0	0.0

(資料)  
・福井県編・発行『福井縣統計書』(各年版)。